エチオピアからターディアス③

働き者で元気な子供たち

（パート2）

◇◇岡崎明彦さんの便りから◇◇

▲ビー玉遊びに興じる子供たち。素足、破れた服が普通だ

子供が一人、ブンナ・ベッドにやって来ました。手には体重計を提げています。

「五サンティム（約五円）で、あなたの体重を計ります」と言っています。体の大きなおじさんが、はかりに上がりました。子供が目盛りを読みます。

「六十五キログラムだよ」

今度は、もっと体の大きなおじさんが上がりました。

「六十五キログラムだよ」

後で上がったおじさんは、

「あの人と私と、同じ体重ってことはないだろう。はかりが壊れているんだろう」

「おじさん、このはかりは日本製で、めったなことでは壊れないんだよ。おじさんは、ほんとうに六十五キログラムだよ」

子供とおじさんは、こんな会話を交わしました。この体重計、実は六十五キログラム以上は動かないのでした。

時計の針もそろそろ十時半を指して、酒の席も盛り上がっています。マシンコ（一弦のバイオリン）を持って少年がやって来ました。

「私の歌をだれか聞いておくれ、私に歌わせておくれ」

少年は、こう叫びながら五～六曲おもしろおかしく歌ってみせます。お客さんが、少年の額に一プル（百十円）を張り付けます。

「アベット、アベット、アベット……」

「神さま、なんてすばらしいお客さんだ。この人に今夜すてきな夜を……」

なんて具合にやりとりするんです。

以前、子供たちに大きくなったら何になりたいか、質問したことがあります。男の子は医者、パイロット、エンジニア、ナショナルサッカーチームの選手、女の子は看護婦さん、歌手などと答えたのを覚えています。私の子供のころみたいで、なにか不思議な気持ちや懐かしい気持ちになって、子供たちってどこの国でも、皆同じなんだなあと思ったものでした。

エチオピアにカバレという、革命後誕生した自治組織があります。サアート・ウラフェイーはもちろん、県も地区の治安維持、政府広報、裁判権、そして家賃の徴収まで受け持つ、地区警察の役目をする組織です。子供が、カバレに連れていかれた。泣き声がしてきた。友達、兄弟が心配顔で中をのぞき込んでいる。あ！子供がカバレから飛び出して来た。

「やーい、カバレなんか怖くないぞ。ここまで追いかけてみろ～」

まったく生意気で、したたかなガキ共だ。親が昼、働きに出ている間、子供たちの親代わりまでするカバレ。まったくおもしろい国だ。

〝リジョッチ、アワケオッチン、アヤミェンネムンム・バルツ！〟

（子供たち、大人なんかに負けず頑張れ）

今回で、このシリーズは終わりますが、楽しいお便りを寄せていただいた岡崎明彦さん、本当にありがとうございました。

土佐清風園へ○○

南国猟友会射撃クラブが 善意の寄付

九月二日、南国猟友会射撃クラブ（西川清進会長、会員四十人）が、芸西村和食で恒例の射撃大会を開き、その賞品代六万円を養護老人ホーム「土佐清風園」（国沢守道園長）へ送りました。

午後三時過ぎ、熱戦を繰り広げた射撃大会が終わり、勢ぞろいしたクラブ員の前で、西川会長が「お年寄りのために使ってください」と手渡しました。

国沢園長は「皆さんの善意に感謝しています。お年寄りに喜んでもらえるような品物を買って、活用していきたい」と、お礼の言葉を述べていました。

▲西川会長が寄付金を手渡した